Translation and Notes,The Reason of State (La ragion di stato), Venezia, 1589, Vol.6., G.Botero(Morihisa ISHIGURO tr.)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/44772

翻訳と注解
G・ボッテーロ『国家理性論』(1589年ヴェネツィア刊)
第6巻

石黒　盛久

Translation and Notes,*The Reason of State (La ragion di stato)*, Venezia, 1589, Vol.6., G.Botero(Morihisa ISHIGURO tr.)

Morihisa ISHIGURO

【解題】

法とそれに裏打ちされる道徳の領域としての国家秩序と、そうした規範を欠く無法地帯としての国際関係の接触面としての、新領土・臣民の獲得を取り上げる第5巻からさらに一歩を踏みこんで、第6巻においては外敵からの国土の防衛の問題が議論される。戦争状態は法・道徳秩序の流動性が極めて高まった状態ではあるが、積極的な海外侵略の場合と比べて、自国の防衛はそれが受け身の戦争行為であるだけに、その流動性を安定性へと転換しようとするモーメントの働く度合いが強い状態ともいえる。実際本章に取り上げられる防衛拠点としての要塞や植民地の設置は、当該国家の主権秩序のコントロールのもとに外部の流動的政治状況を収束させることにより、敵対勢力との均衡状態を再構築する方策といえよう。マキアヴェッリの比喩を借りれば、戦争という大河が無秩序に氾濫することを防止し、これを自国の有利へと導く堤防や分流の役割を果たすものこそ、対外関係における要塞や植民地に他ならない。だがボッテーロはこうした戦略の究極として、その占領や屈服を目的とするのではなく、あくまでも自国の防衛を主眼として敵対国に攻撃ないしは侵略を仕掛ける、予防戦争という概念を提示する。これは現在の軍事思想における先制戦略として精緻化される論点であるが、当方からの積極的攻撃というその性格からして、不確定要素の高い流動的な状況を惹起する点において、超法規的な〈国家理性〉の行使へとより一段と踏み込んだ政策であると言える。そのように本書におけるボッテーロの論述は、安定した法＝道徳秩序に規制される世襲君主政国家に代表される既存の政治体制から出発し、その視点をそれと外部との接触面（併合地→国境要塞・植民地→予防戦争）へと移動させていくことを通じ、限定された条件に即した〈国家理性〉の導入へと展開していく。こうした論述の様態は、その著作の始発にいきなり新君主による新国家の創設という法秩序ゼロの状態を提示し、そこにおける超法規的政治行動の不可避性を宣言しながら、次第に安定した統治形態としての世襲君主政論や共和政論へと転じていく、マキアヴェッリの論法と鮮明な対照をなしている。本書後半に向けてボッテーロは、こうした〈国家理性〉の仮借なき行使の方向へと上り詰めていくことになるが、ボッテーロとマキアヴェッリの著作の構成法のベクトルのこのような対照性が、前者による後者の批判の本質とどのようにかかわってくるかは、今後の探求の大きなテーマであろう。その一方でこのような手段を選ばぬ国家の防衛（国家の至上性）という議論を打ち出

平成27年10月1日受理

しつつ、他方でボッテーロは、他国に対抗して国家の自立が維持できない場合、如何なる屈辱的な条件の下であっても自国の存続を企図すべきである（国家の至上性の放棄）と論じているが、こうした相互に矛盾する二つの国家観の相関性の理解もまた彼の思想を解明するうえで、一つの重要な論題となろう。

【翻訳と注解】

第六巻

1　外敵から自国を防衛することにつき論じる

ここまで我々は、臣下を平穏従順のもとに抑え込んでいく術につき論じてきた。以下では一転して、騒乱と崩壊の外在的原因から国家を如何にして防衛することが出来るかにつき、論を進めることとしよう。その際に大前提となるのは国家安泰の要諦が、敵とか危険とかいうものを、自国からなるべく遠くに引き離しておくことに存するということである。なぜなら不都合さの大半は、こうした不都合さが近くに存在するという点に求められるからだ。次善の策はこうした不都合が迫り来った際に、それを退けるだけの力を有するように取り計らっておくことである。ところで自国をこうした不都合から遠ざけるには、いろいろな方法がある。こられの方法のうち第一のものとは適切に築かれた要塞によって、自国への入り口や通路の守りを固めてしまうことである。

2　要塞について論じる

自然そのものが私たち自身の防衛のため、要塞を築くということを教え諭してくれている。それというのも自然はたくさんの硬骨や軟骨によって、［生き物の］脳や心臓を取り巻いているからである。それは危険を遠ざけその生命を安らかならしめんがために他ならない。また自然は多種多様な殻とか針とか固い外皮とかによって果実を覆ったり、棘突き出た穂などを使って穀類を鳥の襲撃から守ったりしている。そうした訳であるから私は、要塞というものが君主にとり有益なものであるかどうか、疑念を抱く人がいることがどうしても腑に落ちない[1]。自然そのものが［骨とか殻とか棘といった形で］それを用いているからである。どれほど強盛を誇る大国といえども、自身の臣下の動向や近隣諸侯の意図に対し疑念を抱かずに済むほど強盛な国はあり得ない。このどちらの場合に際しても、要塞の存在は君主たる貴兄らに安全を保障してくれるものなのである。貴兄らはそこに戦争に備えて武器その他の軍需品を貯蔵しておくことができるし、兵学校における訓練の如き体裁のもと何人かの兵士を駐屯させておくこともできよう。即ち［要塞という手段を通じ］ごくわずかの箇所に防御を施すだけで多くの地域を防衛することができるし、またごくわずかな出費によって多くの事態に対応することが可能となるのである。多大な才能に恵まれた古のギリシア人たちや、万事につき卓越した判断力を示したローマ人たちも常に、築城に意を用いてきた。そのことは彼らがコリントやターラント、レッジョその他の地域の要塞に多大な信を置いていたことからも推察できよう。ローマ人たちはその支配権と国土を、カンピドリオの丘の上の砦の効果により維持していた。それは決して国境上の要塞ではなく、その国家の中心もっと言えば共和国の心臓に置かれた要塞である。

国家に出来する事態は多彩を極める。また戦争にあたり生じてくる状況もまことに多様である。だがそれに対しても、そこを通じて不都合や混乱が入り込んでくる通路を抑える要塞によって、対処することが可能である。ペルシア人と言えば、多数の騎馬隊とその熟練の腕前に常に信を置いていた民族であるが、彼らの事例もまた要塞の活用が必要不可欠なことであることを証立てている。なぜならペルシア人に一度ならず撃破されたにもかかわらずトルコ人たちは、適当な個所を次第に要塞化して行くことによって広大な地域を占拠し、あげくの果てには大都市ダブリーズを奪取してしまった。そして

この都市に大要塞を築城しこれを確保したのであった。かくしてペルシア人たちは要塞を有さないばかりに、田園も都市も奪いとられてしまったのである。

３　要塞が満たすべき条件に付き論じる

さて以下においては、要塞が如何なるものであるべきかにつき論じることとしよう。それはまずその設置が不可欠の場所に、せめてもその設置が有益な場所に築かれなくてはならない。不可欠な要塞とは即ちそこが要塞化されなければ、貴兄の領土が開きっぱなしとなり、その国家が敵の侵攻に対し剥き出しとなってしまうような箇所を守る要塞のことである。他方でもしそれにより繁華で富裕な都市が防衛され、また一旦緩急の際に近隣住民の救援先・避難先として役立つとすれば、そうした要塞もまた有益な要塞と言えよう。またそうした要塞は［国家の中枢から］十分に離れた個所に設置されねばならない。なぜならこうした要塞は、我らを取り巻く敵や危険に対する抑えとなるからである。それというのも敵や危険がこうした要塞にかかわずらっている間は、我らの側は煩わされることなく平安を楽しむことができるし、またその間にこうした敵や危険に対して適切な備えを講ずることができるからである。シチリア島やナポリ王国にとってのマルタ島の要塞や、ヴェネツィア共和国にとってのコルフ島の要塞が、まさにこのような類の要塞に他ならない。単に我らの中枢から離れた地にあるというのみならず、敵のど真ん中にある要塞もまた我々に、多大な安全を提供してくれるものである。オランやメリジャ、ペニョン・ディ・ヴェレス、タンジール、マザガン、アルジージャといった要塞（これらはすべてカトリック王がアフリカに設置した要塞である）が、スペインにとってのこのような類の要塞の役割を果たしている。またローディやナポリ、マルヴァシアやファマゴスタの要塞もまた、そのような敵中深くに位置する要塞である。国力の分散や縮小を引き起こすことなく、適切な数量の兵士や軍需品が供給できるようにするため、このような類の要塞はごく少数でなければならない。また要塞はその立地とその装備の両面において、堅固なものでなければならない。立地において堅固な要塞とは即ち、その土地の峻嶮さによってあるいは河流や湖沼といった水のもたらす恩恵によって、守るに適した場所となっているようなところのことである。このような条件のもと堅固な地勢を誇る要塞都市としてはマントヴァやフェラーラがあげられるが、なかんずくこれに当てはまるのがヴェネツィアであり、またドイツにおいてはストラスブルグ、低地諸国においてはホラント州やゼーラント州の無数の要塞都市に他ならない。この２つの地域のことを私は、この天地において自然条件の故にもっとも堅固な地と称揚したい。なぜならこの２つの土地は、その無数の個所において出入りする海の干満や、そこを縦横に廻る多くの大河川により四方を取り囲まれているため、驚くばかりに守られているし、その土地の低さゆえに堤防やダムを決壊させることにより、海や河川の水によりその土地を開放し水浸しにしてしまうことができるからである。要塞の防備という点に関していえば地勢以上にその形態が一段の堅固さをそれに提供するような、そのような要塞こそがより強力な要塞となろう。具体的には、その側面部を入念に防御された城壁と堅固に固められた土塁、そして広く深い堀などが求められる。その際には、城壁よりも土塁の方がいっそう重視されることとなるし、さらに言えば城壁や土塁より、堀の方がさらに一段と重視されよう。だがもしこの要塞がその兵糧や兵器、弾薬そして兵員、なかんずく力量ある指揮官を十分配備されていなければ、いま述べたような要塞の装備だけではまだ十分とは言えない。というのも峻嶮な地勢といえども卑怯未練な手合いを、その勇猛果敢な守備者とはなし得ないからである。だがこれとは逆に力量ある一定数の兵士がおりさえすれば、彼らはそれが脆弱なところであっても、

どんな場所をも守りきることができるものだ。それゆえ我々は難攻不落を謳われた要塞が、いとも容易に略取されてしまった数々の事例を知っているのである。なぜなら要塞の地勢の堅固さに安心しきった君主は、それに適切な素質を有する守備隊を配することを怠ってしまうからである。またそれだからこそ同様に難攻不落の要塞が、もっとも峻嶮で近寄り難い個所から落城してしまうということが生じてくる。そのことはマケドニア人により占領されたアオルノ山やインドのピエトラの事例や、泥沼になった個所からスキピオによって占領されたカルタヘナ、海上からギーズ公フランソワに制圧されたカレーの事例により、我々にも首肯されるところである。シリアのアンティオコス大王は、名高いアカイア騎兵団が駐屯し、その故に難攻不落とされたサルディスを攻略したが、それというのも城壁の上にたむろする小鳥たちから、そこに守備兵がいないことに気がついたからに他ならない。反対に天嶮を欠きまた防御のための施設も整っていない場所を守り切るのは、大変英雄的な行為である。なぜならこうした場所の元来の条件に信を置くことができない君主たちは、信頼できる兵士と武将そこに配備することになるからである。当代においてこのことの実例となるのが、ハンガリーのアグリアとマルタの要塞である。この二つの場所は容易に攻撃し得る場所にあるため天嶮にも恵まれず、また城壁の設備も拙いものであったが、兵士と将領の力量により英雄的に防衛されたのである。これらの場所の防衛は、まさに彼らの双肩にかかっていたのだ。それゆえアゲシラオスはなぜスパルタには城壁がないのかと問われた時、武装した自身の兵士たちを示しつつ、「ここにある！」と叫んだ訳だ[2]。彼はまた更にこの言葉に、都市は材木や石材によってではなく、住民の心身の能力により防衛されねばならないとも付け加えている。ただしそれが救援可能な場所になければ、どんな要塞も結局何の役にも立たないことになる。というのももし敵の攻撃が熾烈を極めその包囲が長引けば、［精兵に守られた］どんな要塞もついには落城の憂き目を免れることは出来ないからだ。つまり救援を受けることができないような要塞は、兵士たちの墓場になるに過ぎない。これこそキプロス島のニコシアの要塞の運命であった。このような理由に鑑みるに最上の要塞は、海浜に面した要塞だということになる。なぜならこのような要塞は、［海がもたらす］烈風の助けを受けることが出来るからだ。

4　植民地につき論じる

ローマ人たちは、敵対者や武勇の民を統御するためその支配の初期には、その国境地帯の峻険な場所に植民地を営んだものである。彼らは戦勝の結果として敵から取り上げるに至った土地を、相当数のローマ市民やその同盟者たるラテン人に分け与え、この地に定住せしめることにより、不意の攻撃に対する備えとしたのであった[3]。そこで植民地と要塞のどちらがより一段の安泰をもたらすか、検討することも適当であろう。だがこの点について言えば、植民地がいっそう有利であることは明白である。なぜなら植民地には要塞の機能も含まれているが、その反対ではないからである。そこで国家理性の博識の民であるローマ人たちは、要塞よりもむしろ植民地を頼りとすることの方が多かったのである。だが当世においては植民地より要塞を活用する場合の方が多い。というのもその方が設営に容易であるし、即効性を期待できるからでもある。植民地はその創設に際して、一段の熱意と熟慮を要するものであるが、その成熟に時間を要するものであるため、そこから期待される果実を早々に摘み取ることは期待できない。だが植民地が要塞と比べいっそう安泰で、半ば永続的な利益をもたらすものであることは確かである。このことはセウタやタンジールの事例がこれをよく示している。これらの場所はポルトガルがモーリタニアの地に有する重要な基地であるが、植民地の形態をとっていて、そ

のため近隣のイスラム教君主（シェリフ）や蛮族どもの圧力や攻撃に対して、容易に自衛することが可能となっている。またカレーの例もこれと同様である。この都市は西暦1347年に、エドワード3世配下のイギリス人たちにより植民地とされた。そしてこの民族がヨーロッパ大陸に有する最後の基地となったのである[4]。また植民地はこれを貴兄の本国から、余りに遠く離れた場所に設置するべきではない。なぜならこうした場合、貴兄がそれを救援することが容易でないため、それはたちまち敵の餌食とされてしまうか、さもなくば時節と共に、それらの本国にお構いなしの勝手な行動に走り始めるからである。実際その大半が地中海沿岸に位置していた、ギリシア人やフェニキア人の創建になる諸植民地は、このような行動に走ったのであった。ローマ人はこのことに鑑み適切にも、その支配地のその他の部分よりもむしろ、イタリアの内部により多くの植民地を創設した。そしてイタリアの外の地に対しては、ローマ建国の600年後になるまでそれを導入することがなかった。この時にローマ人が［イタリア外に創設した］最初の植民地は、アフリカのカルタゴ市とフランスのナルボンヌであった。

5　守備隊について論じる

しかし急速な発展を遂げその支配権が世界の三大陸に及ぶようになるに及び、ローマ人には植民地を設営することは、あまり適切なことではないように思われるようになった。それは設営場所が遠隔地となることや、それが境を接することとなる民族（それは一方ではドイツ人、他方ではパルティア人のことである）の勇猛さの故であった。そこで彼らはローヌ川とドナウ川そしてユーフラテス川の岸に、大軍を配備するようになった。これらの守備隊はアウグストゥス皇帝の治下には44個軍団、騎兵を除き歩兵だけを数えても220000人に達した。またラヴェンナとミセーノを基地に二つの艦隊が常備されてもいる。それらは全地中海の制海権を握っていた。というのもラヴェンナ艦隊がイオニア海及び東方（レバント）地域のその他の全ての海に生じる出来事に対処する一方、ミセーノ艦隊が西方の諸海域を管轄したからである。だがこうした野戦軍や駐屯部隊の大規模な配備に伴い、次のような不穏な事態が生じるに至った。即ち多数の兵士を一か所に安易に集結させらため彼らは、一つにはその指揮官の扇動により、また一つには彼ら自身の猛気によりしきりと反乱を起こすに至り、このことがローマ帝国全体にとり大変な危険を生じさせることとなったのである。かくしてたくさんの部隊が一団となって彼らの司令官の誰かを皇帝に擁立し、そこから不可避的に凄惨極まりない内戦が生じてきたのである。というのも多数の兵士が互いの間で騒動を起こしたり、一致して君主に対する反抗に立ち上がったりすることなく、長期にわたり多数の兵士が一団をなしていることは不可能だからに他ならない。もしこうした軍の司令官たちが党派心に満ち、事あれかしと虎視眈々としている手合いであれば、彼らがその野心の実現に走り兵士たちの間に騒動の炎を点じることは、いとも容易いことでしかない。そこで彼らを敵との戦いへと導くか、いくつかの地に分駐せしめることが肝要となってくる。それというのもこうした分割により勢力が分散され、兵士たちの野心や猛気が鎮められ、司令官やその他の悪人どもに加担する気力が打ち消されるからである。そうした配慮こそ恐らく、トルコにおいて［軍隊による］災厄が生じなかった要因であろう。この国においては約６００００人の騎兵がヨーロッパ側に、それよりやや少ない数の騎兵がアジア側に分かれて配置されているのである。トルコ皇帝がこれらの兵士たちをあちらとこちらに分けて配置しているため、兵士たちにとり軍事作戦に従事する時を除き一同に会する折がなく、従って彼ら自身の勢力を認識するということもないわけである。従ってこうした兵士たちが猛気のままに蜂起するということも無ければ、安易に司令官たちに扇動されるがまま

になるということも無い。というのも兵士たち各自はその封土（タンジマート）、即ちトルコの大君主から給与の代わりに与えられた農園に居を構えており、そこから生み出される収穫と快適さを享受しようとの思いが、彼らを鎮静させてしまうからである。

6　国境地帯をあえて荒廃せしめることにつき論じる

いくつかの民族においては自国への敵対者の侵攻を困難にするため（大自然が諸帝国を山や海、川のみならずモーリタニアをギニアから、ヌミディアをヌビアから、ヌビアをエジプトから分けることに倣って）、彼らの国の国境地帯をあえて荒廃せしめる挙に出ることが見られる。このようなことは古のスエヴィ人もこれをなしたところである。また同様な施策は近年でも、大トルコを自国から遠ざけるため、ペルシア王タマスにより実行されている[5]。彼は［この目的のため］、国境地帯の4日分の旅程にあたる領域を荒廃させた。

7　予防的戦争について

敵を己が祖国から彼方に追いやり、彼らの攻撃から自身を安泰ならしめる最良の手段は、敵の本国に戦争を持ち込むことに他ならない。なぜなら自分の尻に火がついている者は、他人のことなどに構ってはいられなくなるからだ。ガリア人に対する戦争と第2次ポエニ戦争のときを除いてローマ人たちは、このやり方を彼らの重要な戦争の全てにおいて厳守した。だがこれら二つの戦争もまた、戦場を海の彼方［カルタゴ本土］とアルプスの彼方［ガリア本土］に移さない間は、これを終結せしめることができなかったのである。ハンニバルもまたローマ人に対する戦争の作戦につき、アンティオコス王に助言して常にこう言っている。もしローマ人たちをイタリア本土で攻撃しないなら、戦争に勝利をおさめることはできないであろうと。だから私は当世において何人かの者が、トルコの侵攻を自国で待ち受けるべきか、それともかの国に攻撃を仕掛けるべきかと、あえて議論をしているのがなぜか理解できない。古代人たちはこんなことにつき疑念を感じることなどなかった。古代の名将たちはこぞって攻撃されるよりも、攻撃する方が遙かに良いという見解を抱いていた。なぜなら全く無謀という訳ではない攻撃は、敵軍を混乱に陥れ、彼らの収益や資産の、換言すれば軍需物資の少なくとも一部分を奪い取ることになるからである。敵国内での戦争はまたこうした軍需品を彼ら自身の手で破壊することを強要したり、その支配に対する［臣民の］不平不満を招き寄せたりすることにもなる。［敵国内の戦争で］もし勝利をおさめることができれば、その成果は計り知れないものがあるし、もしそれで敗北したとしても、それにより生じる我が方の損害はわずかなものに過ぎないし、その戦争が自国から遠く離れたところで行われるものであればなおさらである。あげくの果てに戦争が長引いた場合、それは攻撃された者よりも攻撃をする者に有利な事態となる。ハンニバルとスキピオと言えば、軍事界の花形とも称されるべき存在であるが、前者はローマ軍とイタリアの外において、後者はカルタゴ軍とアフリカの外において戦うことを恥としたのである。トルコもまたキリスト教徒と戦いについて、我らを彼らの国において待ち受けるのではなく、我らの［公然たる］戦争計画はもちろん［隠された］攻撃意図に対してすら先手を打ち、戦争を仕掛けてくるのである。かくして彼らは時には此方、時には彼方と我々に対して戦争を挑み、我々が彼らに攻撃を加える時間を与えぬままに、我々から広大な土地を奪い取った。だがここで留意しておかなければならないのは攻撃というものが、貴兄が攻撃を加えようとする者の戦力に比し、兵力においてまたその質においてあるいはその有する便宜において、いっそう大きな戦力ないしはせめてそれと同等の戦力を必要とするものだということに他ならない。もしある者が敵と対等に渡り合える

戦力を有しないと自覚するなら、彼は間道や重点個所を要塞化することにより、自身の劣勢を補強しなければならない。こうした要塞化された間道や重点個所により足止めを食らうことにより敵軍は、その戦力を低減させその時間を空費することになる。このようにして敵軍は自ら貴兄に対して、その兵力を糾合しあるいは外国援軍を導入するゆとりを提供してくれるのだ。マルタでの出来事がこれを実証している[6]。聖エルモ砦の攻撃に着手したトルコ軍は五月の一か月を丸々空費してしまい、その精鋭を損耗させてしまったあげく、我々の側が団結し、敵を攻撃する勇気をもつようになる時間を与えてしまったのであった。

もし貴兄が敵に対し予防的戦争を仕掛ける戦力をもたない場合には、[貴兄の敵対者の] 有力な敵対者に、[予防戦争を仕掛けるという] 貴兄が出来ない仕事にとりかかるよう、その背後を突くべく扇動するという手が残されている。バシリウス・パトリキウスにより海戦においてしたたかに打ち破られたヴァンダル王ゲンセリックは、東西両ゴート王にローマ帝国を攻撃するよう要請したのである。かくして彼は危機を脱したのであった。だがこうするにあたってはアラゴン家からその身を守ろうとして、返ってフランス人の虜となってしまったルドヴィコ・イル・モーロに生じたように、事態がさらに悪化しないように振る舞うことが肝要だ[7]。

8　敵の党派分裂を維持し、また敵の要人と好誼を結ぶことにつき論じる

敵国や近隣諸国の内部にある党派対立を利用することや、これらの国の君主の側近に侍る顧問官や諸侯、将軍やその他の高位高官にある人々と誼を通じることも、これらの脅威に対する対策となる。なぜなら彼らが、貴国に対する武力行使を妨害したり、こうした武力行使の対象を他の国に逸らしたり、その発動を遅らせることによりこうした作戦が無に帰すように計らってくれたり、こうした作戦の発議を通報することで我々に便宜を図ってくれたりするからである。なにしろあらかじめ予見された災難は、[そうでない場合に比べ] もたらす害が少ないものだ。もしこうした要人たちとの交流が頻繁で、そのためこうした国々に反乱や謀反、暴動の懸念が生じれば、それは貴国にとり益々好都合なことであろう。敵国が混乱に陥れば陥るほど、自国の側は安泰になるからに他ならない。こうしたやり方はイギリス女王を僭称するエリザベスなる者が、フランドルにおける〈カトリック王〉[フェリペ2世] や「いともキリスト教的なる国王」即ちフランス国王に対して施した策略であるし、従って我々 [カトリック] 側もまた信仰の敵 [プロテスタント諸国] に対してこれを施すべきものである。このエリザベスについて言えば、彼女はフランドルやフランスに不平不満の機運を醸成したり、そこに異端を生じさせることに全力を尽くした。そして助言を与えたり資金を供与したりしてこれらの情勢を煽り立てつつ、自国から災いの炎を遠ざけ、またこの術を駆使してスコットランドにおけるメアリ女王への不平の徒をけしかけた。かくして彼女は [スコットランドにおける国民の] フランス派への反感を募らせ異端の伝播を助成し、かくて自国を安泰ならしめたばかりか、かの国を半ば己が支配下に置いたのである。実にこの人物こそは我々に、「主君に与える助言なし」ということを明らかにしてくれる存在である。

9　近隣諸国との同盟につき論じる

敵の近隣の都市国家や諸侯あるいは敵国の勢力の対抗者と結ぶ防御同盟は、決して些細な論題ではない。この共通の敵国が彼らの内の一国に対してすら武力行使に出ぬよう、これらの国々が一致団結するのではないかとの、[この敵国の抱く] 恐れや疑念の故に他ならない。このようにしてスイス人は己が身を安泰ならしめている。というのも彼らが相互間にこうした相互防衛同盟を結んでいるため、彼らに属する最

も小さな村をすら攻撃しようという者は、全く跡を絶ってしまったのである。またヴェネツィア人たちはトルコの君主(スルタン)スレイマンと長き休戦状態を保っていたが、それというのももし彼がヴェネツィアを攻撃したら、このことがキリスト教君主たちにその共通の危機を契機として、彼に対し彼らが大同団結する機会を提供してしまったであろうことを、彼が良く理解していたからであった。だが同盟という問題については、この後他の個所で語ることとしよう。

10　雄弁につき論じる

雄弁というものはなかんずく、敵にその企図を断念させるにあたり効果を発揮するものの一つである。教皇シクストゥス4世とナポリ王フェランテによりフィレンツェ共和国に対し発動された戦争において、多大な苦難と危険に曝されたロレンツォ・デ・メディチはフィレンツェからナポリに直接赴き、王と膝詰めの談判を行った[8]。そして彼は物事をたいそう巧みに語る術を心得ていたから、王を教皇との同盟から離脱させ、フィレンツェ人と協調させることに成功したのである。同様に雄弁を用いてジャンガレアッツオ・ヴィスコンティは、大軍を率いミラノに接近したフィリップ・ド・ヴァロアを後退せしめた[9]。互いにナポリ王位継承を主張してアラゴンのアルフォンソとナポリのルネが戦ったとき、アルフォンソはルネに加勢するフィリッポ・マーリア・ヴィスコンティの兵によりガエタで捕縛され、ミラノに連行されてしまった[10]。だがそこで彼は雄弁を用いて、軍隊を動かしてすら得られなかった成果を上げた。即ち彼は、ナポリ王国がフランス人どもの手中に落ち彼らがイタリアの主人となることが、ミラノ国家にとり如何に危険なことであるかをヴィスコンティ公に滔々と弁じたてたのである。かくしてアルフォンソはフィリッポ・マーリアを自身の側に引き寄せ、彼から好意と支援を引き出すことにより遂にルネに打ち勝ち、ナポリ王位に留まったのであった。

さて他の君主たちに対して我々の危険が彼らにとっても共通の危険であり、敵の強大化が我々にとってのみならず彼ら自身にとっても脅威となることを主張することは、我らの側に［こうした君主たちの］支援を獲得し、反対に敵から［こうした君主たちの］支援を奪い取るにあたり、極めて適切な手段に他ならない。ローマ人たちはマケドニア戦争に際しアイトリア同盟を味方に引きつけるため、またアイトリア戦争に際してアカイア人を味方に引き寄せるため、そしてまたアジア地域の戦争に際しては諸国の君主と民衆を味方につけるため、この手を実に効果的に使ったものである。

11　敵が自国に侵攻してきた後に行うべき対策につき論じる

上記の事柄は全て敵が貴国に侵入するに先立って、打っておくべき策に他ならない。敵が貴国に侵入したのちには、これまた別の対策を施すことが肝要となる。そのいくつかについては既に先立つ諸巻で触れておいたが、そこで取り上げられたのは君主にとり、自身の臣民を戦争に駆り立てることが適当なことであるか否かということであった。結論としていうなら策謀に依ろうが軍事力に依ろうが、敵を分裂させ弱体化させ得るすべてのことが活用されるべきである。

12　敵軍の兵糧を絶つことにつき論じる

敵の食糧補給の便宜を絶つこともまた有効である。そのためにはエスツェグの包囲戦に際しトルコ人がフェルディナント王の兵に施したように、糧秣の補給路を寸断するか、皇帝カールのプロヴァンス侵攻にあたり、フランス人が入念に行ったように、その地の収穫そのものを取り去ってしまえばよい。［フィレンツェの］コジモ公はその国家が天然自然の要害に守られており、教会国家との境界線からしか侵入者がトスカナに糧秣を運び込めないのを見て取り、教皇たちと友誼を深めることに意を常に用いた。

また彼はその一方で、［トスカナへの侵攻にあたり］当地の糧秣を活用しようとの意図をもたぬよう、穀物が収穫されるや、彼が各属領（コンタード）にあらかじめ指定した城塞に、農民が自身の収穫を各自で運び込むようにと指令した。こうして後に各人がその必要な分を、その度毎にそこから引き出すようにしたのである。それは突然の戦争にあたって、［侵攻した］敵軍が自身で糧秣を補給できず、また当地でそれを徴発することもできないため、飢える他に途がないようにするためであった[11]。

13　陽動作戦について論じる

陽動作戦は予防戦争とは意味を異にするものである。即ち予防戦争が敵が貴兄に攻撃を加えるに先立ち行われるものであるのに対して、陽動作戦は敵が貴兄に攻撃を開始した後に行うものだからである。陽動作戦の目的とするところとは、敵が我が方の国を捨てて相手の国の内部で戦争を行うようにすることに他ならない。他方で予防戦争の眼目は敵が戦争を我が国内に持ち込まぬよう、それに先立って戦争を敵国内で引き起こすということに存する。もっとも鮮やかに行われた陽動作戦は、アガトクレスにより行われたそれであろう。カルタゴ人によりシラクサ市が十重二十重に包囲された際に彼は、それ以上持ち堪えられないと見てとるや、兵士たちを船に乗せアフリカへと渡航し、カルタゴ本土をきりきり舞いさせたのであった[12]。かくしてカルタゴは、シチリアに派遣した兵力を本土に呼び戻すことを余儀なくされたのであった。それに劣らず大胆で鮮やかな陽動作戦の事例が、西暦829年に実行されたコルシカのボニファチオ・コンテのそれに他ならない。というのもサラセン人どもがシチリアを攻撃し、この地を鉄槌と戦火で阿鼻叫喚に陥れていた時、上記コンテは一隊の兵士と共にアフリカへと進出し、敵と対峙し常に勝利をおさめたのである。かくしてサラセン人どもは、自身の本拠地の危機を見て取りシチリアから撤収し、その地を再び平和におくことを余儀なくされたのである。

14　敵と和約を結ぶことにつき論じる

しかし敵の力があまりにも強大で、いかにしてもそれに対し自国を防衛する期待が持てない時には、最小限の犠牲によって切迫する滅亡を回避することもまた、賢明なる君主の務めの一つには違いない。このような場合には金銭の提供によりかちとる、どんな休戦や和約も価値あるものとみなされよう。かくしてフィレンツェ人は多大な金銭を貢ぐことにより、実にしばしば大きな危難から逃れてきたのである。ジェノヴァ人もまた19000ドゥカートの提供によりベルナボ・ヴィスコンティを撤収させたし[13]、ヴェネツィア人も同じ手を使ってシジスモンド王の将ピッポの軍を撤収させている[14]。その結果シジスモンドはピッポに溶かした金を飲み下させて、この裏切り者を処刑したのである。そればかりではない。ヴェネツィア人はこの手を使いトルコの魔手をいつも逃れている。即ちヴィズィール（大宰相）に贈り物を送り[15]、トルコ大君主の側近くの要人をも贈物漬けにし、果てはこの大君主自身に目も眩まんばかりの貢物を差し出すことで、その攻撃の刃を鈍らせているのだ。

15　他国の庇護のもとに甘んじることにつき論じる

もっとも国家そのもののではなく、その自由が危険に曝されるだけに留まるのであれば、他国の庇護に甘んじるかさらにはその支配のもとに置かれることをすら、恥じ入るべきではない。なぜならこのような宗主国は多大な力を有する国であろうから、貴国を必ずや守ってくれることであろう。かくしてカプア人たちは、サムニウム人の暴虐を逃れるためローマ人の庇護に身を寄せたのであるし[16]、ジェノヴァ人もかつてはフランス人やミラノの諸公の保護を受けた。ピサ人もまたヴェネツィア共和国からの最初は支援を仰ぎ、続いてはそれに対する自発的

服従を行うことにより自身を防衛しようとした[17]。だがこれは必ずしも賢明なことではなかった。というのも両国間の距離の遠さと交通の困難さの故に、庇護者あるヴェネツィア人はピサ人たちを、彼らの敵であるフィレンツェ人たちから、支出に見合わぬ効果に依らずしては、守ってやることができなかったからである。どんな君主であろうと自身に利益以上に損失をもたらす国の保護を、買って出ようなどとはせぬであろう。

16　隣国が戦争に狂奔している間に平和中立を維持することにつき論じる

だが貴兄の国家の安泰と健全を確保することに関していえば、隣国が戦争に狂奔している間、自国の守りを固めじっとしていることに勝る政策はない。なぜなら次のようなことが起こりがちなものだからに他ならない。即ち従来戦い合っていた者同士の間に和平や休戦が結ばれるや、戦争の嵐は今度はその周辺の国々の上に襲いかかってくるものだからである。ナポリ王カルロ2世とアラゴン家のフェデリーコの間に結ばれた和平の後、従来これら二人の王たちに仕えていた、一部はカタロニア人、一部はイタリア人からなる軍団が20隻のガレー船に分乗して、シチリアとプーリアを進発した。彼らはテンプル騎士団員だった某ルジェーロ修士を大将に戴き、マケドニアとギリシアの海浜地域を荒らし回り、前代未聞の災害を引き起こした。というのも軍勢が大軍に膨れ上がるに従い、アドリア海地域の諸群島を略奪したり、本土地域の都市を攻撃したり、数限りない人々の破滅を元手に自身の財貨を得ようという野心を、彼らが抱くようになったからに他ならない。この災厄は12年間にわたって続いた。ついに彼らはアテネ公を殺害し、その領国を支配するにさえ至ったのである。同様にフィリッポ・マーリア［・ヴィスコンティ］とヴェネツィア人が和平を結ぶに及んで、これらの支配者たちに仕えていた諸将は、その軍をこぞって教会国家［の侵略］へと振り向けたのである。後にヴェネツィア人とマクシミリアン1世帝の間に［和平が成り］両者が武器を置いた際、この戦争に参加していたスペイン兵及びガスコーニュ兵は、フランチェスコ・マーリア［・ロヴェーレ］の麾下、教皇レオ10世を苦しめるべくウルビーノに集結した[18]。かくしてこの災厄から逃れるため教皇は、計り知れないほどの金銭を使うことを余儀なくされたのであった[19]。

1　『君主論』第20章、『ディスコルスィ』II-24などにおいて、城塞無用論を唱えたマキアヴェッリを暗示している。

2　スパルタ人が都市を守る城壁を作らなかったことへの言及としては、『ディスコルスィ』Ⅰ-24を参照。

3　植民地の国防上の有用性についてはマキアヴェッリ『君主論』第3章に論じられている。

4　カレーの地は1558年、フランス軍の将ギーズ公フランソワにより奪還された。

5　ペルシア・サファヴィー朝の第二代君主タマスープ１世（在位1524-1576）のこと。

6　1565年のオスマン・トルコ軍による聖ヨハネ騎士団本拠地マルタの攻略作戦のこと。5ヶ月に及ぶ包囲の後、スペイン軍からなる援軍の到着を前にして、トルコ軍は撤収を余儀なくされた。

7　ミラノ公ルドヴィコ・スフォルツァ（通称イル・モーロ／在位1494-1499）は甥ジャン・ガレアッツォ（在位1476-1464）から公位を簒奪するにあたり、ジャン・ガレアッツォの舅であるアラゴン家のナポリ王アルフォンソ2世と対立関係に入った。この窮状の打開のためルドヴィコは仏王シャルル8世によるナポリ王国征服事業に協力したが、このことが裏目に出て、フランス軍のイタリア侵入からはじまった一連の戦争（イタリア戦争）の混乱の中、シャルル8世の跡を継いだ仏王ルイ12世に捕らえられ、その公位と領土を失った。

8　パッツィ陰謀事件(1478)の鎮圧の結果、教皇シクストゥス4世及びナポリ王フェルディナンド1世と戦争状態（パッツイ戦争）に入った、フィレン

ツェの支配者ロレンツォ・デ・メディチは単身ナポリ宮廷に赴き、フェルディナント1世との直接交渉を通じて和平を達成した。

9　ジャンガレアッツォ・ヴィスコンティは14世紀末に活躍したミラノ公（公爵在位1395-1402）。叔父ベルナボを失脚させロンバルティア地方を統一した余勢を駆りイタリア統一を企図したというが、フィレンツェ共和国の抵抗を前に挫折した。

10　ナポリ王位を主張するアラゴン王5世は、ポンツァの海戦(1435)においてミラノ公フィリッポ・マーリア・ヴィスコンティの派遣したジェノヴァ艦隊に敗れ捕虜となり、ジェノヴァ人によりミラノ公へと引き渡されたが、ルネの背後にあるフランス勢力によるナポリ支配の危険性の力説により、ミラノ公の政策の急転換に成功したといわれている。

11　1596年のトリノ版以降の諸版においては、更に一段落が追加されている。

12　『君主論』第8章参照。

13　ミラノの僭主ベルナボ・ヴィスコンティは、1376年と1378年の二回にわたってジェノヴァと戦端を開いているが、前後の事情から考え1376年の戦争に際してのことと考えられる。

14　年代的に考えるに、神聖ローマ皇帝ジギスムント（皇帝在位1410-1437）のことか。

15　ヴィズィールはアッバース朝期に起源をもつイスラム教国家の大臣職のこと。オスマン帝国においてはウル・ヴィズィール（大宰相）とそれを補佐するクッペ・ヴィズィールがあった。

16　第一次サムニウム戦争の発端(前343)をさす。

17　1494年から1509年にかけ独立に成功したピサ市民は、フィレンツェの地中海進出を妨害しようとするヴェネツィアからの支援を背景に、フィレンツェによる再征服に抵抗した。

18　領国ウルビーノ公国を奪った教皇レオ10世とその甥ロレンツォ・デ・メディチ（小ロレンツォ）に対し、その奪還を目指す前領主フランチェスコ・マリア・デッラローヴェレが仕掛けたウルビーノ戦役(1517)のこと。

19　1596年のトリノ版以降の諸版においては、「ユリウス2世により用いられた政略」と題された一章が更に追加されている。